



三春中学校だより

第 24 号

発行日 平成30年 8 月 17 日

発行所 三春町立三春中学校

電 話 0247-62-2181 F A X 0247-62-6978

E-mail miharu-j@fcs.ed.jp

【教育目標】『三春に暮らす生徒一人ひとりに、将来に対して喜びと生きがいのある人生を主体的に創造する力を育み、地域に信頼され、ひいては、国際社会に貢献できる人材を育てる』

【校区学校保健委員会「ノーディスプレイ運動」分科会より～「999」は正しかった！～】

前号でお知らせした「三春中学校区学校保健委員会」で、「ノーディスプレイ運動」分科会に参加しました。校医の矢吹先生、篠原先生、町子育て支援課の保健師さん、三春小学校・御木沢小学校の養護教諭の先生、沢石小学校の校長先生、本校PTA厚生委員長さん、本校保健主事、そして、三春中学校長の9名の分科会でした。

まず、各校の「ノーディスプレイ運動」に関して発表をいただき、研究協議、そして、校医の先生よりの内科・眼科の専門的見地からの指導助言をいただきました。

まず、各校の取り組みを整理すると、大まかに、5つの内容に整理されます。①各家庭との連携、②各校での呼称、実施曜日、③児童・生徒会活動、④PTAとして、⑤「ノーディスプレイ・ノーメディアデー」の意義です。

①各家庭との連携に関しては、制限のない「ディスプレイ・メディア」は、家庭における生活時間の乱れや視力の低下、就寝時間の遅れによる朝食の不摂取などを招くため、カードやチェックシートを活用したり、「ノーディスプレイ見直しのお願い」を各家庭に配付し、各家庭での約束事を決めて学校に報告してもらったりするなど、学校と各家庭との連携により、その制限が欠かせないということでした。②各校での呼称、実施曜日に関しては、「ノーディスプレイの日」や「ノーメディアデー」などと呼ばれ、「0」のつく日や「999」として毎日実施していました。③児童・生徒会活動に関しては、「999」のように、生徒自身が自分たちの生活を見直し、改善するための生徒の主体的活動としての取り組みが紹介されました。④PTAの活動に関しては、厚生委員会の事業として「ノーディスプレイ運動」に取り組み、シートを回収、教員がコメントを記入したり、教養委員会主催でフィルタリング等を扱った教育講演会を開催したりするPTAがありました。⑤の意義に関しては、そもそもどんな弊害があって「ノーディスプレイ・ノーメディアデー」が実施されているかについての話し合いでした。以下にその際、話し合われたものをご紹介します。

【目や脳に及ぼす悪影響について】

- ・生活時間が乱れ、学習や睡眠の時間が損なわれる。 ・体内時計が狂う。
- ・手元を長時間見ることによって目の調節機能が低下し、ボールが捕れなかったり転んで骨折したりする。
- ・ブルーライトを長時間浴びることによって目に障がいが起こる。
- ・目によいといわれるバイオレットライトを浴びられる屋外活動の機会が奪われる。
- ・携帯ゲーム等を長期間することで、アルコール依存症やニコチン依存症のように、ゲーム障がい（依存症）になる。
- ・前頭葉（脳のことを考える部位）の活動が低下する。
- ・親子のコミュニケーションが不足し、精神面の発達が遅れ、他人と関わる力も低下し、人と関わることで得た情報を処理する能力も低下する。

40分という短い分科会の中でも、これだけの弊害が報告されています。子どもたちにメディアをうまく使える力をつけさせていくため、小学生、中学生、それぞれの発達段階に応じて、人との関わりの中から、人が人として生きていけるよう、ぜひとも、「ノーディスプレイ運動・ノーメディアデー」を成功させましょう。

【PTA校外補導後半の部お世話になりました！ ～お盆を楽しみました。～】

8月13日（月）に要田地区盆踊り、8月14日（火）に沢石地区盆踊り、8月15日（水）・16日（木）には三春盆踊りが実施されました。

要田地区は天候が回復し、駐車場にはいくらか水たまりがありましたが、盆踊り自体は予定通り実施され、大きな櫓の前で盆踊りが繰り広げられ、屋台もたくさん集まり、それぞれにたくさんの人たちが並んで行列をつくっていました。翌日の沢石地区盆踊りは晴天のもと、櫓のてっぺんには大きな扇が飾られ、ちょうど子ども踊りの景品が配られているところでした。8：00からは打ち上げ花火の披露があり、夜空に大輪の色鮮やかな花火がたくさん上がっていました。三春盆踊りは天候が少し不安定でしたが、それなりに楽しむことができました。いずれも集合時間は7：50。遅い時間、補導にご参加いただいたみなさん、ありがとうございました。

前半の部も合わせ、今年の夏も子どもたちは安心・安全に地域行事を楽しむことができました。





【『命の輝き』 = 自分もまんざら捨てたものではない！～町特別支援教育セミナー講演会～】 (前号よりの続き)

『発達障がいのある子どもの教育を推進・充実させるために』

講師 郡山女子大学短期大学部教授 小林 徹 先生

6 地域に信頼される特別支援学級をめざして

私は、中学校の特別支援学級担任として、「生徒の発達を支える授業」と「地域との連携」を指導の両輪として位置づけた。「地域との連携」では、通常学級における障がい理解教育の授業、卒業生と語る会、学級公開、障がい児教育を考える会（連続講演会）、ケースを通じた諸機関との連携、進路先の開拓などがあげられる。

(1) 人格発達における青年期の特徴

思春期（第二次性徴を通じて身体に成長・変化が起きる時期）の身体変化に共いう心理的変化や対人関係を中心とした社会的変化が起こり、10歳頃から30歳頃までの時期を青年期と呼ぶ。青年期に入り、内外の急激な変化への「自我」（自分が考える自分）の適応過程の中で、思春期の変化に人は戸惑いと不安を引き起こし、自己評価が下がる傾向にある。また、外的変化（「家族を含めた対人関係の変化」と「社会進出にむけた接触」）の中で円滑な人間関係を結ばなければならない、この内外の変化を統制・克服するためには、自我が大きく強くなることが要求される。

一方で、外圧であるはずの人間関係が問題を和らげる作用もある。それは、「友人関係」である。友人関係は、青年期の発達課題である「心理的自立」と「自我同一性（identity）の確立」に大きく影響を与える。

(2) 「友人関係」と「心理的自立」・「自我同一性の確立」

青年期には、親からの自立をめざすが現実的には困難である。同年代・同性でグループ化し、その強い結束力や連帯感を不安に対する防衛手段として活用する。また、「自我同一性（identity）の確立」のためには、同質性・異質性の承認も含めた、自我に対する同様の他者評価も不可欠であるため、青年期の人格発達において「友人関係」の果たす役割は非常に大きい。青年期に友人関係がうまく築けなかったり交流する経験が不足したりした場合、その後の人格の発達に影響を及ぼし、学習にも大きく関わってくる。

(3) 「将来展望の成立」

青年期には抽象的思考力が発達し、未来へむかって将来的な展望をもつことが可能となる。それは自分の将来の姿を想像する力となり、青年期の学習活動を支える原動力となる。青年期の「将来展望の成立」は、その人生の目標に向かうための段階構造に基づく積極的・肯定的な人生設計に結びつき、学習の動機づけやその人の人生を方向づける機能をもつ。

(4) 障がい者の青年期とは

日常生活における度重なる失敗体験、苦手意識、挫折感などから自己評価は低くなり、周囲との関わりを避ける場合も見られる。

① 傷つける学力

通常学級に在籍し、授業を理解できず、授業についてこれない児童生徒がいる。多くは、特別支援学級入級を拒んできたケースである。毎日の授業がわからずいちばん辛い思いをしているのは本人なのだが、親への遠慮や友達との別れが嫌などとさまざまな理由から日々堪え忍ぶ毎日を送っている。あまりのつらさに不登校や非行に走ると相談に結びつけられるが、その辛さに慣れてしまうと相談・転籍のきっかけがなかなかつかめないという現状がある。

② 「オレ、バカじゃねえし。ワルだし。」「オレも勉強がわかるようになるのか？」

私の特別支援学級を訪問した小6男子。私に向かって、「オレ、こんなところ行かねえから。オレ、バカじゃねえし。」「オレ、ワルなの。勉強わかんないんじゃないの。やらないの。」ポケットに手を突っ込み、肩を怒らせてそう私に言い放つ姿は必死になって自分を守っているように見えた。そんな中、私は彼に、「4+4は？」という質問をした。彼は横を向いたまま、「9。」と答えた。私は彼が小学校の6年間、どんな辛い思いで授業をうけてきたかと思うと胸が締めつけられる思いだった。「ありがとう。今まで辛い中を本当によくがんばってきたね。」と声をかけると彼の両目から涙がほとぼしり、振り絞るような声で出た言葉が、「先生、このクラスに入ればオレも勉強がわかるようになるのか？」だった。

(その4 紙面の都合上、次号以降、複数回に分けてご紹介いたします。)